

# あいさつで良い関係

## 都内で公開研究会 外国人と共に働く



発表するムハマドさん（左）とチトラさん

### 入国前に「介護」の理解を

「外国人介護士と共に働く」をテーマに公開研究会が2日、都内で開かれた。EPA（経済連携協定）介護

福祉士や受け入れ施設などの発表から見えたのは、入国前に介護の仕事を理解してもらおうこと、日本人が働きやすい職場は外国人も楽しく働けること、お互

いに学び合う姿勢を持つことだ。

冒頭、主催者あいさつで川廷宗之・敬心学園職業教育研究開発センター長（大妻女子大名誉教授）は「介護はその人が幸せになる手助けをすること。そのためには介護する人も幸せでなければならぬ。国境なく、それを

どのように実現しているか」と問題を提起した。

インドネシアEPA候補者として2008年（第1期）に来日したチトラ・ファレンティーンさんは、イスラムの女性が頭に布を被る風習に対する施設の理解がなく、「受け入れる前に相手の文化や習慣、宗教を知っておいてほしい」と注文した。また、日本語や

と述べた。利用者や職員と良い関係をつくるため、あいさつや会話をしよう心掛けていた。

「介護福祉士という職種を知らずにEPAに参加し、当初は後悔した」と話すのはムハマド・レジャ・ファウジさん。10年（第3期）に来日した。「介護は訳さず『カイゴ』という言葉で伝えるべき」と進言した。また、介護サービスを受けた利用者が「ありがとう」と言うことを不思議に感じるとし、「利用者や職員のおかげで介護の仕事が好きになった」と話した。

社会福祉法人福祉楽団（千葉県）は法人理念にある「多様性」に照らしEPA候補者を受け入れている（現在介護福祉士取得者を含めて19人）。上野興治・杜の家なりの施設長は、「個別の指導は日本人と同じ。異文化を理解することと通訳の活用など必要なサポートをすることが重要だ」と話した。

（櫻戸新）